

文語文を学ぶ漢字系学習者が困難を感じる点 — 中国・台湾の日本学研究者に聞く —

佐藤勢紀子

要旨

日本語学習者の文語文学習上の問題を明らかにする目的で、漢字系の日本学研究者7名を対象に、文語文学習歴および困難を感じる点についてインタビュー調査を行った。その結果、母国でも日本でも研究を行うのに十分な文語文教育を受けにくい状況であること、中国では国の日本語検定試験に文語文の問題が出題されていること、文法項目では助詞・助動詞の用法が難しいことがわかった。日本語学習者向けの文語文読解教材開発にあたっては、自習が可能であること、海外で広範に使用できる e-learning 形式であること、助詞・助動詞の用法に重点を置くこと、の3点が求められることが明らかになった。

キーワード

文語文、古典、読解教材、漢字系学習者、インタビュー調査

1. はじめに

本報告は、日本語の文語文⁽¹⁾を学ぶ漢字系の学習者が、学習の過程でどのような困難を感じているかについてのインタビュー調査の報告である。本研究の最終目標は、漢字系・非漢字系を問わず、日本語学習者の文語文読解に有用な教材を開発することであり、本報告で提示する調査結果がその一つの足掛かりとなることが期待される。

報告者は、先に、非漢字系の学習者が文語文を学ぶ際に感じている困難について、インタビューおよび質問紙による調査の結果をまとめ、文語文読解教材開発について、1) e-learning 教材が望ましいこと、2) 時代の違いや資料の種別にかかわらず利用可能な教材が求められること、3) 助動詞を中心とする活用語の活用、接続、用法を重点項目とすべきであること、などの示唆を得ている(佐藤近刊)。一方、本報告で取り上げる漢字系学習者が抱えている問題に関しては、中国や台湾では日本の古典を現代語訳で教えることはあっても、文語文読解を本格的に指導しているケースは稀であることが報告されており(坂内 2004、李 2012)、またその指導方法に問題があるという指摘もある(楊 2003)。しかし、それらの研究は教育体制についての概括的な報告にとどまっており、日本語文語文の読解を目指す個々の漢字系学習者がどのようなプロセスで文語文を学び、具体的にどのような点に困難を感じているかについての調査は、十分に行われているとは言えない。

そこで、本報告では、報告者が実施した漢字系日本学研究者7名を対象とする文語文読解教育に関するインタビュー調査の回答のうち、主として各人の学習歴および文語文学習において困難を感じる点の部分を取り上げ、彼らが日本語の文語文を学習する上で特にどのようなことが問題になっているかを明らかにする。その上で、海外における日本語学習者の約3分の1を占める漢字系学習者⁽²⁾の文語文学習を支援するためには、どのような教材が求められるかについて考えてみたい。

2. 調査の概要

インタビュー調査は、2014年5月から2015年2月にかけて、同済大学（上海）、北京外国語大学（北京）、北京大学（北京）、早稲田大学（東京）、東北大学（仙台）を会場として行った。あらかじめ主要な質問項目を定め、半構造化質問調査の形で実施した。主な質問項目は次のとおりである。質問項目の詳細は本報告末尾に付録として掲載する。

1. 基本情報
2. (日本語／古典／文語文) 学習歴
3. (古典／文語文) 教育歴
4. ニーズ
5. 開発教材についての意見
6. その他関係者への要望など

インタビューは調査対象者の了承を得て録音し、文字化した。本報告では、主に上記の1、2、4の部分について報告する。

3. 調査対象者

ここでは、本調査の対象者7名のプロフィール、および、彼らが研究対象として扱っている資料の種別について記述する。回答内容には個人情報も含まれており、特に日本語文語文教育に携わっている研究者は中国・台湾全体で見ても数が限られているため、プロフィールの部分では、調査対象者が特定されないように、各対象者の情報を個別に具体的に記すのではなく、項目ごとに全体の概要を記載する。

3.1 対象者のプロフィール

今回の調査対象者の母語はいずれも中国語である。また、対象者の調査時における所属機関の所在国は、中国（5名）、台湾（1名）、日本（1名：留学中）となっている。

調査対象者は男性5名、女性2名で、年齢層は20代1名、30代2名、40代3名、50代1名となっている。所属機関は7名とも大学で、身分は教授1名、副教授3名、講師1名、大学院生2名（MC・DC各1名）である。専門分野を見ると、上代文学・思想（1名）、中古文学（3名）、中世文学（2名）、近代中心の日本語史（1名）となっている。

なお、対象者のうち4名が日本語文語文の教育経験を持っており、3名は現在も所属機関で文語文教育に携わっている⁽³⁾。それらの教育機関はいずれも所在国における日本語古典教育・文語文教育の拠点であると言ってよい。

3.2 扱う資料の種別

次に、調査対象者が研究上どのような資料を扱っているかについて見ておきたい。表1は対象者が扱っている文語文資料の種別を、形態別、文体別に示したものである。調査対象者を、研究対象としている時代の順に並べ、CL01からCL07までの記号・番号で示す。

表1より、資料の形態については、主に翻刻本が用いられていることがわかる。ただし、インタビューの回答によれば、5名は留学先の日本の大学で写本や影印本を読む訓練を受けたという。また、資料の文体については、対象とするテキストによって様々である。

表1 調査対象者が扱っている資料

No	研究対象とする主な時代	資料の形態			資料の文体			備考
		写本 (原本)	影印本	翻刻本	和文	和漢混 交文	漢文	
CL01	上代		○	○	○	○	○	近世の資料も読む
CL02	中古			○	○			
CL03	中古			○	○			
CL04	中古			○	○	○		
CL05	中世	○	○	○	○	○	○	
CL06	中世			○	○	○	○	
CL07	近代			○		○	○	教育では候文も必要

4. 調査結果および考察

本報告は、文語文を学ぶ漢字系学習者が困難を感じている点を解明しようとするものであるが、その前提として、彼らの古典や文語文の学習歴を見る必要があると思われる。よって、以下では、まず調査対象者の学習歴を概観し、その上で、実際に彼らがどのような困難を覚えているかを見ていきたい。

4.1 学習歴

ここでは、対象者の学習歴を概観する。表2に、対象者が履修もしくは聴講した高等教育機関における日本の古典および文語文入門の授業を、母国と留学先としての日本に分けて示す。表中、△は文語文入門と言っても文法には軽く触れた程度であることを示す。また、◎は文語文を「入門」程度以上に本格的に学ぶ機会があったことを示す。

表2 古典および文語文の学習歴

No	研究対象とする主な時代	母国の教育機関の授業		日本の教育機関の授業		備考
		古典 学習	文語文入門	古典 学習	文語文入門	
CL01	上代	○原文	○通年	?	×	
CL02	中古	○原文	○90分15回	○	○通年	日本で一般学部授業聴講
CL03	中古	○原文	◎	?	×	
CL04	中古	○原文	△1学期	○	×	
CL05	中世	○原文	△1学期	○	×	
CL06	中世	○原文	△1学期	○	○通年	日本で留学生向け授業履修
CL07	近代	○原文	◎	—	—	日本への留学経験なし

表2より、今回の調査対象者に限って言えば、いずれも母国において、古典の原文を読む授業や文語文入門の授業を受ける機会を得ていることがわかる⁽⁴⁾。これは非漢字系の日本学研究者が必ずしも母国でそのような機会を持っているわけではない(佐藤近刊)ことと比べると、恵まれていると言える。このような教育体制が中国・台湾の高等教育機関全般でとられているとは考えにくい、中国出身の調査対象者の多くから、近年、国家主導で行われている日本語検定試験の8級には文語文の問題も出題されるようになったため、教育機関によっては、それに対する対策として、古典や文語文の入門の授業を開設したり、上級日本語の授業に古典学習を取り入れたりするようになってきているという説明を受けた⁽⁵⁾。

しかし、原文による古典読解や文語文入門の授業が行われているとはいえ、日本学研究者の養成という観点から見ると、母国で十分な教育がなされている機関はまだ限られているようだ。対象者のうち、母国で文字通り「入門」程度、あるいはそれにもおよばないごく初歩的な文語文法の授業を受けるにとどまり、日本に留学してからも文語文学習の授業を受ける機会がなかった CL04、CL05 のケースを見ると、研究に必要な資料を読めるようになるためには、かなりの自助努力を強いられているようである。インタビューの回答の一部を引用する。

- ・最初は、ほんとに戸惑ってましたね。あの、本格的に勉強したわけではないので、あのー、最初は戸惑いましたね。でも、あのー、卒論も『伊勢物語』取り上げたので、その際、自分でも少し独学みたいな感じで勉強はしました。(CL04：中古)
- ・最初、だから日本に行ったとき、それこそN(大学名)、当時留学生まだ少なかったんですよ。だから、いわゆる留学生向けの文法の授業というものはなくて、もういきなり日本人の、日本人の学生みんな学部で勉強してきた……高校もそうですね。だからいきなり、だから日本人の学生と同じレベルで勉強しなければならないので、大変でした。(CL04：中古)
- ・文法についてはほとんどまあ、体系的に教えてくれることがないと思います。だいたい先生方は自分の研究分野の内容をそのまま授業の内容として、……(質問者：講義をなさるわけですね。そうすると、文法に関してはご自分で勉強されたということですか)そうですね。作品を読んでもうちに独学で。(CL05：中世)

一方、母国で入門段階の学習を済ませた後、留学先でも授業で文語文を学ぶ機会に恵まれている学習者もいるが、特に留学生対象の文語文入門の授業を日本で受けている CL06 のようなケースは稀であると言ってよい(佐藤 2014, 佐藤近刊)。

4.2 困難を感じる点

次に、調査対象者が文語文の学習過程において困難を感じた点、あるいは現在でも困難を感じている点について報告する。回答の内容は、ほぼ文法に関するものであった。各人が特に困難であるとした項目を表3に示す。

表3 文語文学習において困難な点

No	研究対象とする主な時代	特に困難を感じた点	備考
CL01	上代	(特に上代の) 助詞、現代語と異なる意味の形容詞	
CL02	中古	助詞・助動詞の用法、敬語、主語の省略	
CL03	中古	助詞の用法	文法以外：時代背景、人物の関係
CL04	中古		具体的な指摘なし
CL05	中世	助詞・助動詞の用法	
CL06	中世	補助動詞、活用語の活用	
CL07	近代		具体的な指摘なし

全体として、助詞および助動詞が難しいとする指摘が多いことが注目される。報告者が先に行った非漢字系日本学研究者を対象とする調査の結果では、助動詞をはじめとする活用語の活用や接続についての言及が目立ったが、今回の漢字系研究者対象の調査では、困難な学習項目として、助動詞とともに助詞が挙げられていることが印象的であった。回答の一部を引用する。

- ・やっぱり助詞、助詞が難しい。……特殊な用法があるんですよ。使い方、特に『万葉集』の場合は。(CL01：上代)
- ・勉強する人が一番難しいのは助動詞ですね、あと助詞については一番難しいと思いますね。……時代、現代と古代の差、がありますし、あとは同じ助動詞とか助詞の間で、たとえば意味が同じ、だいたい説明する時に意味が同じとか、そういう使いの、まあ、今はもう教科書の中には書いてるんですけども、区別とかですね、そういうところも、勉強する人にとって一番大事なところだなあと考えていますね。(CL02：中古)
- ・私が注目したのは、文法の助詞とか、あの、何て言うか、特定の、意味とか、注目しています。あの、だいたいの言葉の意味は自分で探せばわかります。でも、そういう助詞はどうやって使うか、そういう使い方は、めちゃ大事なことだと思います。(CL03：中古)
- ・日本の古典文法について、やはり中国人の学生にとって一番難しいのはたぶん助詞・助動詞関係のものなんですね。中国語には似たようなものはありませんので。そして、その使い方もなかなか、あのまあ、複雑なので、……やはり具体的な例、例文とかを挙げて、そしてその例文の中にそれぞれの助詞・助動詞を、この場合はどのような使い方をしているのか、それをはっきり詳しく説明してくれたほうが良いと思いますね。(CL05：中世)

漢字系学習者にとって文語文の助詞・助動詞が難しいのは、CL05 が述べているように、一つには、中国語に類似の文法的要素がない——存在するとしても非常に限られている——ことであると見てよい。そして、もう一つには、やはり CL05 の指摘にあるように、その用法が「複雑」であること、すなわち、多くの場合、単一の助詞もしくは助動詞に複数の用法があり、どのような場合にどの用法で用いるかということがきわめてわかりにくいということであると考えられる。

これについて、CL02 は次の例を挙げて説明している。

- ・一番難しいのは、現代語と違って、現代の日本語の中になかった使い方がたくさんありますので、たとえば、今は「べき」とか、古典は「べし」、実際に、現代の日本語の中では、よく使われている「べき」の使い方は3種類しかないんですけども、古典の中では「べし」は5つの、だいたい5つの意味が含まれていますので、……（CL02：中古）

実際には、学校文法では、古語の「べし」には推量、意志、可能、当然、命令、適當の6つの用法があるとされている。たしかに、「べし」という同じ一つの助動詞でありながら、これだけ多くの用法があり、その識別の仕方がはっきりしないとすると、困惑する学習者が多いのは当然である。

CL03 のコメントにもあったように、名詞など普通の言葉の意味は辞書を引けばわかるが、助詞や助動詞は接続や文脈に応じて個別にその意味を推測していく必要がある。しかも、接続や文脈でも判断がつかず、様々な解釈が可能なケースも少なくない。これは日本語母語話者にとっても難しいことは言うまでもないが、学習者、特に中国語のような助詞・助動詞に相当する文法的要素が希薄な言語を母語とする学習者にとっては、非常に大きな困難をとまなう作業になると言うことができよう。

5. まとめ

以上、漢字系の日本学研究者を対象に、その文語文学習歴、および文語文学習上困難を感じる点についてインタビュー調査を実施し、その結果について分析を行った。非漢字系学習者のための文語文読解教材を作成する上で留意すべき点について、次のような示唆が得られた。

- 1) 母国での教育体制として、一定程度の文語文教育を行っている機関もあるが、本格的な文語文教育を行っている機関は限られており、日本に留学してもそれを受けられる保証はないことから、特に日本研究を目指す学習者に対して、個々の必要に応じて自習に利用できる教材を提供することが求められる。
- 2) 中国では、日本研究を目指す学習者のみならず、日本語検定試験 8 級受験者も文語文学習を必要としていることから、中国の教育機関で、また学習者個人でも広く使用してもらえる教材を作成することが必要である。そのためには、紙媒体の教材よりは e-learning 教材として開発することが望ましい。
- 3) 学習上特に困難な点として、助詞および助動詞の用法が挙げられており、特にその点に配慮した教材作りが必要である。

非漢字系日本学研究者を対象として行った調査の結果と合わせて、今回の調査結果を今後の教材開発に活かしていきたい。

付記

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C) 25370571「日本語学習者を対象とする文語文読解教育の実態調査および教材開発」（平成 25 年度～平成 28 年度、研究代表者：佐藤勢紀子）による助成を受けて行ったものである。同済大学でのインタビュー調査については、研究協力者である東北大学非常勤講師虫明美喜氏の協力を得た。

（佐藤勢紀子 さとうせきこ・東北大学）

注

1. 本研究では、一般によく用いられる「古文読解」や「古典読解」ではなく、「文語文読解」という用語を用いる。これは、本研究で開発しようとする教材が、「古文」が一般に指示する近世以前の文章のみならず近代の文語文体の文章をも対象としており、また、「古典」の範疇に含まれるよく知られた文学的作品のみならず、無名の執筆者による歴史資料等をも対象としていることによる。「古典教育」と「文語教育」の違いについては、三浦（2008）に論がある。
2. 国際交流基金の日本語教育機関調査によれば、2012 年の中国・台湾における日本語学習者は計 1,279,457 人に上っており、海外の日本語学習者の 32.1%に達している。
3. ただし、教育機関によっては、履修希望者の人数によって、授業が開講されない年度もあるとのことである。
4. ただし、多くの場合、それらの授業は同一の授業として行われている。
5. 中国政府の教育部の高等院校外語専攻指導委員会が 2002 年から実施している「高校日本語専攻八級考試」（大学日本語専攻 8 級試験）のことである。日本語主専攻者対象の試験として 4 級試験と 8 級試験があり、前者は 2 年次修了時に、後者は 4 年次修了前に受けることになっている。8 級試験は、日本語のみならず、日本文化、日本文学、翻訳などを含めて、日本語主専攻の 4 年生の総合学力を検定するものである。

参考文献

- 佐藤勢紀子（2014）「留学生を対象とする古典入門の授業—日本語学習者のための文語文読解教材の開発を目指して—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』（9），99-113
- 佐藤勢紀子（近刊）「文語文を学ぶ日本語学習者が困難を感じる点—非漢字系日本学研究者に聞く—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』（1）
- 坂内泰子（2004）「留学生と文語文読解の必要性」『神奈川県立外語短期大学紀要総合篇』（27），59-74.
- 三浦勝也（2008）「古典教育と文語教育」『東京都立産業技術高等専門学校研究紀要』（2），22-25.
- 楊金萍（2003）「中国における日本語古典教育の現状と将来」『国文学解釈と鑑賞』68(7)，86-93

李光華 (2012) 「日本語教育の一環としての日本文学教育について—中国大学生への日本
古典文学教育を中心に—」『日本語日本文学』(22), 51-65

付録

【文語文読解教育に関するインタビュー調査 質問項目】

1. 基本情報

氏名、国籍、母語、年齢（年齢層）、現在の所属、身分、専門分野、研究テーマ

2. 学習歴

略歴

日本語学習歴 期間、週あたり時間数、場所（学校）

日本留学経験 期間、場所（学校）

日本の古典（文学）についての学習歴 期間、週あたり時間数、場所（学校）、テキ
ストの言語（翻訳（ 語）／現代日本語／原文）、指導／学習方法、素材とし
て扱った作品

文語文学習歴 期間、週あたり時間数、場所（学校）、指導／学習方法（特に古語動
詞の活用をどのように学習したか）、素材として扱った作品

3. （古典／文語文）教育歴

日本の古典（文学）についての教育歴 期間、週あたり時間数、場所（学校）、テキ
ストの言語（翻訳（ 語）／現代日本語／原文）、指導方法、素材として扱ってい
る作品

文語文教育歴 期間、週あたり時間数、場所（学校）、指導方法（特に古語動詞の活
用をどのように教えているか）、素材として扱っている作品

4. ニーズ

研究上どのような文語文を読む必要があるか

時代、作品／資料名、原本（写本）／影印本／翻刻本、仮名文／和漢混交文／漢文
研究を始めたのはいつか

研究を始めたとき、文語文読解力は十分だったか、特にどんな点で不足していたか
現在はどうか

どのような文語文読解教育が必要か、どのような文語文読解学習の支援があればよいか

5. 教材についての意見

文語文読解教材としてどのようなものを求めるか

文法学習、とりあげる素材、訳、解説、練習問題、参考資料、その他

文語文読解のための e-learning 教材についてどう考えるか、どのようなアイデアが
あるか

6. その他関係者への要望など